

設計事務所の立場からみた
福井県における住宅設計の動向
—住宅1階の住空間構成の実態とその推移—

桜井 康宏* 木村 慶一**

Actual Conditions and Trends of House Design in Fukui Area
from Architect's Standpoints
— Floor Planning of Ground Floor and Its Trends —

Yasuhiro SAKURAI and Keiichi KIMURA

(Received Aug. 28, 2000)

We have 280 houses of our own planning and design in Fukui area. In this paper we aim to clear the characteristics of our works from the viewpoints of floor planning and to study the trends of 40 years. Floor plans are analyzed chiefly from the viewpoints of relation between the rooms which are mutually connected for family use and the other rooms. And we try to compare with other newly built common houses in Fukui area. The main characteristics of our works are variety and stability in floor planning.

Key Words : Fukui Area, House Design, Floor Planning of Ground Floor, Trend

1. はじめに

21世紀を目前に控えて、生産・生活様式をはじめとする社会のあらゆる側面で価値観の転換が求められる中で、建築の分野における設計者や設計事務所の役割についても基本的な見直しが迫られつつある。本論文は、筆者(木村)自身が過去40年間に手がけた住宅作品を分析対象として、それらを客観的に評価しながら新たな価値観(住宅設計の理念や方法論)を模索するための基礎的研究であり、筆者(桜井)等が先に報告した論文『公室の規模と居室の構成からみた住空間構成の実態—住宅雑誌と福井市の新築着工住宅の比較検討—』(福井大学工学部研究報告第40巻第2号、1992年9月)と比較しながら住空間構成の視点から筆者の作品を位置づけることと、作品の年代別変化を考察することの2点を目的とするものである。

*建築建設工学科 **大学院工学研究科システム設計工学専攻

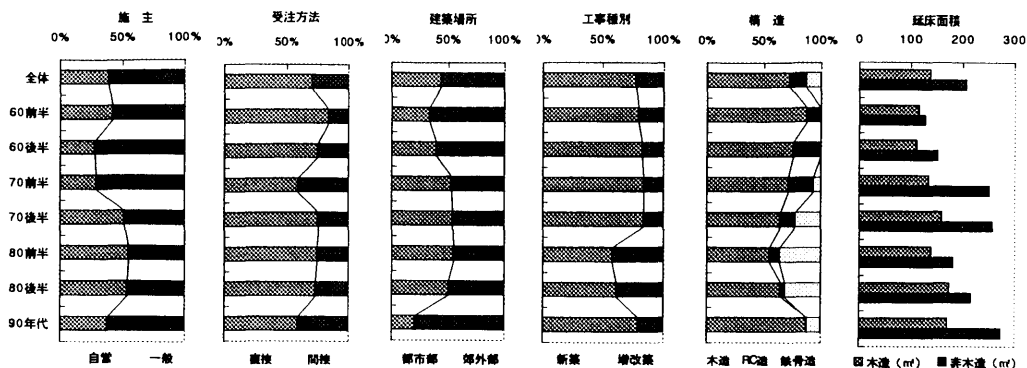


図1. 自己作品の受注概要

2. 自己作品の概要

過去40年間に筆者自身が手がけた住宅作品は280件であり、60年代後半から70年代前半の年代(昭和40年代)にやや多いが、ほぼ5年間に20~30件程度の実績で推移している。これら住宅設計の実務に関する基本事項を年代別に整理したものが図1である。

40年間全体でみると、施主の属性は自営層39%、一般61%、受注方法は直接71%、間接29%、建築場所は都市部44%、郊外部56%、工事種別は新築77%、増改築23%、構造は木造73%、鉄筋コンクリート造15%、鉄骨造12%であるが、年代別にみると、70年代後半から80年代にかけては自営層、都市部、鉄骨造の割合が相対的に高い(80年代には増改築の相対的な高さも目立つ)のに対して、90年代に入ると一般、郊外部、新築、木造の割合が相対的に高くなっており、受注の傾向が変わりつつある(郊外部が79%でとくに高くなっている点を除けば70年代前半までの傾向に戻りつつある)ことが伺われる。また、70年代前半と並んで90年代には間接受注の割合が40%を超えて突出して増えている点も特徴的である。

一方、延床面積については全体平均156㎡であるが、木造と非木造の差は大きく、前者の137㎡に対して後者は206㎡となっている。年代別にみると、木造については70年代後半以降170㎡程度で安定して推移しているのに対して、非木造は80年代にやや減少しているものの90年代以降再び大きく増加している。

3. 住空間構成の実態

3-1. 住空間構成の系統樹

住空間構成の実態については、先の論文と同様に、「公室(家族使用のための洋室群)」と「その他の居室」の関係に注目して以下のような規定に基づいて分析を行っている。

まず、「台所」を含む、あるいは「台所」から連続的に連なる洋室群(ただし、明らかに私的な特定目的に使用される洋室は除く)を「公室(P)」と定義し、その面積規模によって10㎡(約6畳)未満を「K」タイプ、10~20㎡(約12畳)未満を「DK」タイプ、20~30㎡(約18畳)未満を「LK」タイプ、30㎡以上を「LDK」タイプとする。

続いて、住宅1階の公室以外の居室について、公室との関係によって「接続系列(公室と居室が連続的に連なり、廊下を経由せずに行き来できるタイプ)」と「独立系列(居室が公室と分離し、廊下を経由して行き来するタイプ)」に大きく二分し、以下の8系列に分類する。

1. 「居室なし」：公室以外に居室がないタイプ
2. 「接続和室系列」：公室に和室が1室接続し「続き間」がないタイプ
3. 「接続続き間系列」：公室に和室「続き間」が接続するタイプ
4. 「接続和室+独立続き間系列」：接続和室と独立系列の和室「続き間」をもつタイプ
5. 「接続その他系列」：その他の形式の接続系列居室をもつタイプ
6. 「独立和室タイプ」：接続系列の居室がなく和室「続き間」もないタイプ
7. 「独立続き間タイプ」：接続系列の居室がなく独立系列の和室「続き間」をもつタイプ
8. 「その他(洋室系列)」：公室に特定目的洋室が接続するタイプや洋室のみのタイプ

以上の規定に基づき、住空間構成タイプのすべてを系統樹的に表現したものが図2であり、図中では、和室を■、洋室を□、和室続き間を(■■)、洋室続き間を(□□)と表現し、3室続き間を(■■■)、(■■□)等と表現し、接続関係は「・」、独立関係は「+」で表現している。また、先の論文における福井市の新築着工住宅(1989年1月～8月確認申請の473件)と対比して概要を整理したものが表1である。これらから自己作品の相対的特性を挙げると以下のとおりである。

- ① 福井市新築着工住宅(以下「福井一般」)で確認された住空間構成タイプの総数は69タイプである(詳細は先の論文参照)のに対して、自己作品では104タイプと多くなっている。
- ② 公室タイプについては、福井一般では「LK」42%＞「LDK」31%＞「DK」26%の順であるのに対して、自己作品では「DK」51%＞「LK」19%＝「K」19%＞「LDK」11%であり、自己作品の公室規模が相対的に小さくなっている。これを延床面積別にみると、福井一般では面積増加にともなって主要なタイプが「DK」→「LK」→「LDK」へと変化する(公室規模が拡大する)のに対して、自己作品では同様な傾向的推移はみられるものの主要なタイプは一貫して「DK」タイプとなっている。
- ③ 一方、公室以外の居室数については、福井一般では「2室」40%を中心に1～3室が8割強を占めるのに対して、自己作品では「4室以上」45%を含めて3室以上が7割強と多くなっている。これを延床面積別にみると、福井一般では面積増加にともなって主要な室数が1室から4室以上まで順に増加するのに対して、自己作品では小規模面積帯においても3室以上が6

表1. 住空間構成の概要(自己作品と福井一般)

		福井一般								自己作品							
		全 体	延床面積(m ²)							全 体	延床面積(m ²)						
			～99	～100	～120	～140	～160	～180	～200		～99	～100	～120	～140	～160	～180	～200
総数(件)		473	58	68	91	88	48	48	72	280	75	53	34	21	28	9	60
公室	LDK		31%	2%	18%	30%	34%	52%	50%	39%	11%	4%	2%	3%	9%	7%	23%
	LK		42%	38%	54%	43%	42%	38%	29%	42%	19%	8%	9%	30%	20%	28%	10%
タイプ	DK		26%	52%	28%	26%	24%	10%	21%	19%	51%	45%	64%	50%	62%	58%	67%
	K		1%	9%		1%				19%	43%	25%	17%	9%	7%		2%
居室数	0室		4%	16%	7%	2%		2%		1%	4%	4%	2%	3%			2%
	1室		29%	40%	56%	45%	23%	10%	15%	6%	5%	11%	7%	8%		3%	
	2室		40%	38%	35%	44%	52%	48%	50%	15%	19%	22%	24%	20%	32%	10%	18%
	3室		17%	7%	1%	9%	23%	31%	23%	28%	29%	42%	36%	28%	36%	23%	9%
	4室～		10%				2%	8%	13%	50%	45%	21%	30%	43%	32%	65%	73%
居室系列	居室なし		4%	16%	7%	2%		2%		1%	2%	10%					
	接続和室		33%	43%	51%	43%	32%	21%	23%	8%	13%	14%	13%	8%	16%	10%	15%
	接続続き間		16%	12%	12%	18%	23%	15%	6%	19%	19%	10%	40%	22%	40%	11%	13%
	接・和+脱・脱		9%		1%	5%	6%	10%	21%	24%	16%	10%	20%	16%		17%	25%
	接続その他		6%	12%		5%	3%	4%	10%	11%	8%	10%		19%	11%	10%	4%
	独立和室		11%	5%	16%	13%	14%	8%	10%	6%	2%	7%	5%	6%	7%	30%	6%
	独立続き間		19%	10%	10%	12%	20%	38%	25%	26%	22%	18%	13%	22%	27%	38%	21%
	その他(洋室)		2%	2%	1%	1%	2%	2%	4%	4%	14%	24%	7%	8%		17%	15%

表 2. 和室続き間の保有率(自己作品と福井一般)

		福井一般								自己作品							
		延床面積(m ²)								延床面積(m ²)							
		全 体	～99	～100	～110	～140	～160	～180	～200	全 体	～99	～100	～110	～140	～160	～180	～200
公 室 タ イ プ	LDK	40%	10%	8%	7%	30%	52%	54%	71%	32%	100%	100%	100%	60%	75%	100%	37%
	LK	43%	14%	5%	36%	54%	78%	43%	87%	64%	100%	80%	70%	100%	58%	50%	58%
	DK	58%	20%	68%	67%	67%	80%	60%	86%	63%	50%	71%	75%	72%	84%	67%	71%
	K	67%	80%		0%												
全 体		46%	22%	24%	35%	49%	65%	62%	81%	63%	70%	75%	75%	78%	72%	50%	65%

割強を占めており、面積増加にともなう室数の変化が相対的に小さくなっている。

④ 系統樹的にみるといずれも多様であるが、福井一般では「接続和室系列」への集中度合が相対的に高いのに対して、自己作品はより多様に分散し、「接続和室+独立続き間系列」および「その他(洋室系列)」の相対的な高さが目立っている。これを延床面積別にみると、福井一般については、小規模面積帯では「接続和室系列」への集中度がとくに高く、面積増加にともなって多様化しているが、中規模面積帯(140～180m²未満)では「接続続き間系列」と「独立続き間系列」への分散傾向、大規模面積帯では「独立続き間系列」と「接続和室+独立続き間系列」への分散傾向が目立っており、面積増加にともなう「独立続き間」の増加傾向が顕著となっている。これに対して自己作品では、面積増加にともなう傾向的特性はみられず、あらゆる面積帯において多様な住空間の構成がみられる点が特徴となっている。

⑤ 続いて、「和室続き間」保有率の観点から自己作品と福井一般との比較を示したものが表2である。福井一般では延床面積の増加にともなって保有率が20%程度から80%程度まで大きく変化しているのに対して、自己作品ではあらゆる面積帯において70%程度の保有率を示している点が大きな特徴であるが、ただし、大規模面積帯では保有率がむしろ低下している点と、「LDK」タイプでの保有率が福井一般以上に低い点が特異的となっている。

⑥ なお、図2において「網掛け部分」は福井一般にはみられない自己作品独自の住空間構成タイプを意味しているが、その合計は57タイプ(タイプ総数の55%)であり、居室数の多さとともに(■)(■)(■)(■)(■)(■)(■)(■)のように、公室以外の部分に多様な続き間形式が多く存在することが大きな特徴となっている。

⑦ 以上のように、住空間構成タイプからみて福井一般と自己作品には大きな違いがあることが確認できるが、福井一般にみられる延床面積の増加にともなう変化が小さく、あらゆる面積帯に共通して「小規模公室(洋室)」と「続き間(和室)」の両者を核にした多様な住空間構成を示している点が自己作品の大きな特性とみることができる。なお、少数ながら「LDK」タイプは、このような流れの中では異質の新しい動きと位置づけることができる。

3-2. 接続居室の接続形式

ここでは、接続系列の「和室」と「続き間」について公室との接続形式を検討する。接続和室の接続形式は図3に示す4タイプ、接続続き間の接続形式は図4に示す6タイプに類型化し、その結果を福井一般と対比して示したものが表3および表4である。これらから自己作品の相対的特性を挙げると以下のとおりである。

① 接続和室については、福井一般では「両用I型」53%と「一体型」39%の両者で大半を占めるのに対して、自己作品では「一体型」が14%に減少して「両用I型」52%に続いて「両用

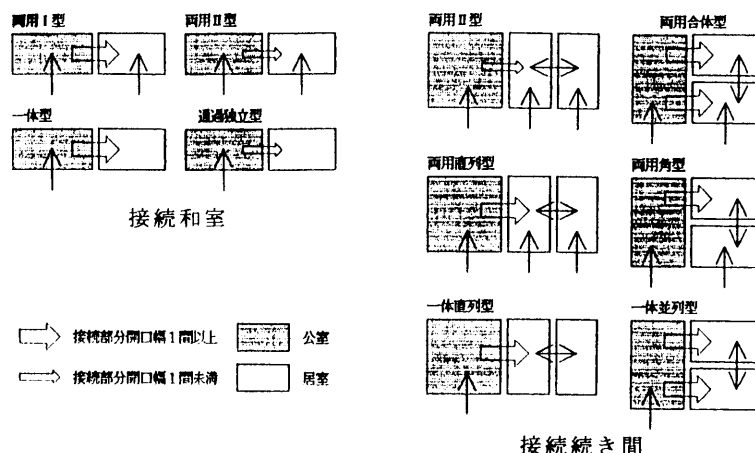


図3. 接続居室の接続形式の類型化

表3. 接続和室の接続形式(自己作品と福井一般)

		福井一般				自己作品			
		両用I	両用II	一体	通過独立	両用I	両用II	一体	通過独立
公	LDK	49%	5%	42%	4%	42%	29%	21%	8%
室	LK	52%	5%	39%	3%	59%	27%	12%	2%
規	DK・K	60%	6%	34%		52%	31%	13%	4%
概	全体	53%	6%	39%	3%	52%	30%	14%	4%

表4. 接続続き間の接続形式(自己作品と福井一般)

		福井一般						自己作品					
		両用II	両用合	両用直	両用角	一体並	一体直	両用II	両用合	両用直	両用角	一体並	一体直
公	LDK	8%	17%	17%	50%	8%		26%	15%	44%	15%		
室	LK	6%	11%	40%	29%	14%		27%	11%	40%	16%	2%	4%
規	DK・K		3%	46%	46%	3%	3%	27%	10%	40%	10%	8%	5%
概	全体	4%	9%	39%	39%	9%	1%	27%	9%	50%	12%	8%	4%

II型」が30%を占めており、自己作品における和室の独立性が相対的には強い点が特徴となっている。ただし、公室規模の大きい「LDK」タイプに「一体型」がやや多い点は福井一般と共通である。

② 接続続き間については、福井一般では「両用直型」と「両用角型」が共に39%で大半を占めているが、自己作品では「両用角型」が12%に減少して「両用直型」が50%に増加すると同時に「両用II型」が27%に増加している点が大きな特徴である。なお、公室タイプ別にみると、福井一般については、「LDK」タイプでは「両用角型」、「LK」「DK」タイプでは「両用直型」がそれぞれ圧倒的に多いという違いがみられるのに対して、自己作品では公室タイプによる違いがみられない。

③ 以上を総じてみて、福井一般では公室と接続居室との「一体性」が全体的に強く伺われるのに対して、自己作品においては「一体性の強いタイプ」と「独立性の強いタイプ」に分化・多様化していることが認められる。

4. 住空間構成の年代別変化

自己作品の住空間構成の年代別変化をみるため、「公室タイプ」「住空間構成タイプ」「その他の居室数」の関係をマトリックス化して年代別に示したものが図3である。ここから以下の傾向を読みとることができる。

① 公室タイプについては、近年になるほど多様化しつつも「K」タイプから「DK」→「LK」→「LDK」タイプへと順に大規模公室へと相対的な比重が推移しつつあることが認められる。すなわち、60年代前半には「K」55%、「DK」29%であったものが、60年代後半から70年代前半には「DK」60%強、「K」20%強に変化し、70年代後半には「DK」63%を中心に「K」から「LK」「LDK」に分散し始め、80年代前半には「DK」53%、「LK」「LDK」とともに20%強に推移（「K」が減少）し、80年代後半には「DK」が半数を下回って「LK」の比重が31%に高まり、90年代には「LDK」38%、「LK」34%、「LDK」24%と多様な構成に推移している。

② 一方、その他の居室数については、80年代前半までは概ね「増加」の傾向をみせていたものが、80年代後半以降「減少」に転じていることが確認できる。「4室以上」の割合でみると、60年代前半には26%であったものが、70年代前半には56%、80年代前半には64%に増加しているが、その後80年代後半には48%、90年代には28%へと減少している。

③ このような変化の中で住空間構成タイプについても、70年代において「独立続き間系列」から「接続続き間系列」および「接続和室系列」への変化が現れ始め、90年代には「LDK」あるいは「LK」タイプの「接続和室系列」といったように、80年代以前には極めて少ないタイプの登場や、「DK」タイプの「その他(洋室系列)」という新しいタイプの登場が90年代の特徴として挙げられる。

	年代別										計
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
独立不仕											12
独立和室系列											2
独立洋室系列											4
独立その他系列											5
独立和室系列											3
独立洋室系列											5
独立その他系列											12
独立和室系列											10
独立洋室系列											2
独立その他系列											3
独立和室系列											6
独立洋室系列											12
独立その他系列											4
独立和室系列											28
独立洋室系列											25
独立その他系列											19
独立和室系列											10
独立洋室系列											9
独立その他系列											28
独立和室系列											20
独立洋室系列											51
独立その他系列											240

図4. 住空間構成の年代別変化(自己作品)

5. まとめ

自己作品の基本的な特徴は、「小さな公室(洋室)」と「続き間(和室)」を核にした居室群住居の構成があらゆる面積帯に共通して現れていることと、公室とその他の居室の関係において「一体性の強いタイプ」から「独立性の強いタイプ」まで多様な構成がみられることであるが、ただし、年代とともに「小さな公室」から「大きな公室」への変化や「独立系列」から「接続系列」への変化の傾向もみられ、90年代には新しい住空間構成のタイプが登場するなど、自己作品においても90年代以降「転換期」を迎えつつあることが伺われる。この点は、敷地条件の変化や家族人数・家族構成そしてライフスタイル等との関係を含めてさらに検討を深めることとしたい。さらに、転換期における住宅設計見直しの基本的な課題の一つとして、近代以降の「洋風化」「個室化」そして「公私室型の全面的普及」という大きな趨勢の中で、「伝統的和風スタイル」の現代的再生をいかに図って統合するかという課題があるものと考えられ、このような視点からさらに理論的な考察を深めることとしたい。